

「みこころの奥義」

エペソ人への手紙 1 : 9 - 10

January.30.2022

エペソ人への手紙 1 : 9 - 10 (パウロ)

Preface

以前エペソ書の講解を始めた頃、「エペソ書は人間の言葉ではとても言い尽くすことも表現することも出来ない、神様側の視点に立った大きなスケールの救いについて記録しています」というようなことをお話ししましたが、

その「大きなこと」と言うのが、今読みました「みこころの奥義」であり、「一切のものが、キリストにあって一つに集められる」ということです。

エペソ書に記されている「救い」についての内容は、ローマ書に記されている「救い」についての内容よりも、規模という面で遥かに大きく次元が違います。

ローマ書は、私たち個々人の救いについて話しながら、そこに必要な聖書の教えをまとめていますが、

エペソ書では、私たち個々人の救いよりも遥かに大きく究極的で、神様の観点から、または天上の視点、全宇宙的なものとして救いを語ります。

私たち、救いと言いますと、イエス様に出会った信じたという個人的な信仰体験が伴いますので、どうしても救いを私と神、または人と神という枠でばかり捉えようとしてしまいますが、

本来、聖書が教えてくれる「救い」は、特定の宗教やその教理を信じたら心に平安があったとか、ご利益があったとか、物事上手くいくようになったとか、または、死んだら極楽浄土・天国に行けるようになったという個人的な宗教体験、または宗教心を満たす程度のものではなく、

一切合切、何もかも、見えるものも、見えないものも、予想し想定し考察できるものから、予想も想定も考察も出来ないもの、一切合切、全部残らずすべて、万事万物に関わる重大な真理として、「救い」を語ります。

そして、先ほどお読みしました聖書箇所では、その救いのわざを「みこころの奥義」だと言います。

「みこころ」とは、神様の何物をも推し量ることの出来ない「神の思い」を意味する言葉ですし、「奥義」とは、物事において最も奥深い大切な事柄を意味する言葉ですね。

つまり、「みこころの奥義」と称されるものこそ、知り尽くしがたく、極めがたいのは当然のこと、見当をつけることさえも出来ないほどの神様の深い思いとご計画とその計画の遂行が、イエス・キリストを通してなされた「救い」であ

るということです。

さらに、その「救い」の内容・実体について、10節でこう言います。

エペソ人への手紙1：10（パウロ）

私たち人間個々人の救いに焦点を当てますと、「愛する」とか「哀れむ」という言葉が動員されますが、もっと大きな規模の神のみこころの奥義という視点に立って救いを話す時には、「時が満ちて計画が実行に移される」という、何かこう壮大なものが動き出した回り始めたというような印象を与える表現が用いられます。

つまり、主イエス様は、罪深く滅びるしかない運命にあったかわいそうな私たち人間のみを救うためにこの地上に来られたのではなく、

全宇宙を、天にあるもの地にあるもの、認識出来るもの出来ないもの、見えるもの見えないもの、霊的なものそうでないもの一切合切を、キリストにあって一つに集めるという全領域に及ぶ（全領域とは口で言っていますが、その領域の端を到底知覚できないほどの）ものが、神のなさる救いの内容だと言っているわけです。

Part One

「一つに集める」という言葉は、「統括する」とか「従える」という意味合いの言葉で、秩序を失ってんでばらばらになっているものをまとめる、統括する、従えて導くということです。

天にあるものも、地にあるものも、何もかもが、キリストにあって一つにまとめ、従っていくというのが救いの全貌です。

キリストにあって、キリストをかしらとして、人間同士、または人間社会のみならず、万物の間にあるどうしても噛み合わない秩序、葛藤、もつれがすべて綺麗さっぱり解消され、和睦のうちに事新たに一つとされていくのが、みこころの奥義と称される、救いのわざの実体です。

私たち人間社会を見るだけでも、いやもっと小さな単位、会社とか、学校とか、チームとか、クラブとか、家族とか、兄弟とか、友人同士とか、夫婦同士という単位を見ても、私たちが辛く苦しく思うことは、「一つになれた瞬間はあったとしても、それがずっと続くことはない」ということです。

皆が皆、正しい秩序のもと、一つになりたい、一つになれば、一つになったら、ずっと一つでいられたらなんと幸いな事だろうかと思いますが、一つになれません。

夫婦仲睦まじく見え、また実際に夫婦仲睦まじいと当人たちが思い、実際にひ

とつになっても、瞬時に冷え冷えとするような他人感、隔ての壁、憎しみとむかつきが湧いてきて、何でこうも噛み合わないんだという思いに満ちてしまうことがあります。(ありますよね?)

子供たちを見て、「うわ〜、本当に仲良く遊んでいるなあ」と思った矢先、目を反らした瞬間、爪を立てて相手の顔を傷つけているようなこともあります。

そんなんだから、やっぱり秩序が必要だと、秩序を打ち立てますが、その秩序にもほころびが見られ、変なことに秩序と秩序がぶつかると、より良い秩序が生まれるのではなく、またそこに新たな葛藤とにらみ合いと争いが生じてしまいます。

自然界や天然界もそうです。

仲睦まじい姿や美しい姿を見せたと思うと、得も言われぬ残忍な捕食活動が繰り広げられたり、荒れ狂う天候に様変わりしたりと、秩序が一瞬にして混乱カオスに陥ることを見て、それが自然界の秩序だと納得しようとしています。本当のところ、それが秩序なのか分からない。

人間界や地球の自然界は、ある程度、私たちも認識し知覚できますが、膨大過ぎて分からない宇宙の事とか、目には見えないけれども確かに存在する霊的世界の事とか、それらすべての領域において秩序が壊れているということを聖書は教えてくれます。

そして、それらすべてのことが、何もかもが、キリストにあって一つになるというのが、神のご計画しておられる救いであり、みこころの奥義です。

神であられるイエス・キリストがそのいのちを犠牲に献げたほどですから、人の救いは、神がなさるこの救いのお働きの中で最も大事な中核を成すものであることは間違いない事実ですが、

正確に言いますと、神の救いは私たち人間の救いという規模だけに納まるものではないということです。

天にあるもの、地にあるもの、一切のものをキリストにあって、一つにするというずっと遥かに遠大な規模の問題です。

そして、この救いの実体、遠大さを知っているのか知っていないのかでは、私たちの信仰生活においても大きな違いが出てきます。

Part Two

もう少し理解を進めるために、エペソ 1 : 10 には訳されていない言葉について考えてみたいと思います。

エペソ 1 : 10 (パウロ)

今ここに、「天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められる」とありますが、日本語の聖書にも、英語の聖書にも、韓国語の聖書にも訳されていない言葉が、原文のギリシャ語の聖書にはあります。

それは、“再び”という意味の ANA という言葉です。

なので、この 10 節の言葉を原文通り訳しますと、「天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、**再び**一つに集められる」となります。

実のところ、この“再び”という言葉が入ると入らないとでは、雲泥の差が出てきます。

“再び”という言葉がないならば、「いつの時からなのかよく分からないけれども、とりあえず取っ散らかっているように見える状態をより良く変えるために、**初めて**、イエス・キリストによって一つにされていくのかなあ」と思えてしまいますが、

“再び”という言葉が入りますと、元々、万物は神のもとに一つに集められており、至って円満な秩序を保っていたんだけれども、途中で何かをきっかけに秩序が壊され混乱に陥ってしまったということになります。

そしてついに、また“再び”、元ある状態に、本来ある姿に、もとの自然な形に回復するということになります。

即ち、この聖書箇所が私たちに教えてくれる救いとは、回復です。

私たち人間に与えられた救いは、この回復した世界に入れられるということです。

しかも、聖書が約束しているこの回復した状態・世界は、二度と、再び、混乱に陥ることのない永遠の、完璧な回復です。

なぜならば、神のひとり子であり、神ご自身であるイエス・キリストが、いのちの犠牲まで払った回復だからです。

もっと正確に言いますと、神のひとり子イエス・キリストの犠牲まで払われているので、以前のものよりもさらに良いものとして、回復するということです。

「一切のものが、キリストにあって、再び、一つに集められる」というのが、神様が抱いておられるキリストにあってのご計画であり、遂行であり、完成です。

ということは、今あるこの世界は不自然なんです。

私たちが持つ違和感、納得のいかない思い、残念でならない気持ち、分かっている風けれども分からないというようなことを感じて当然の不自然な世界、あるべき姿でない状態が、今存在しているこの世界です。

コロサイ人への手紙 1 : 15 - 17 (パウロ)

元来、すべての万物が誰によって、どなたによって造られたと言っていますか？

イエス・キリストによってです。

キリストは万物よりも先におられ、万物とともにおられ、万物の上におられる方です。

キリストこそ創造主なる神ですね。

でもその事実を、キリストの神性ばかりか、キリストが神であられるということを人は認めようとしません。

聖書はいつも、父なる神と御子なるイエス様を独立した存在として説明するとともに、同じ栄光、同じ権威をお持ちの唯一の創造主なる神であると言います。

だからヨハネは、自身が書いたヨハネの福音書で、「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもなかった」と言いながら、キリストこそ父なる神様と同等の神であられ、創造主であられるという宣言からヨハネの福音書を書き始めます。

人間以外の被造物は、サタンでさえも、悪霊でさえも、イエス・キリストが神であられ、救い主であられ、この世界を終わらせ、すべてを新しくし、回復させる創造主であることを知り、認め、恐れ、「この不自然な世界を自然なものだと思わせている自分たちの（俺たちの）悪なる働きを邪魔しないでくれ」と懇願しながら泣き付きながら、キリストが神であることを、創造主であることを認めます。

Part Three

ローマ書8章に行きますと、人間以外のすべての被造物は、キリストが神であられることを当然のように分かっている、この世界が不自然なことであることも分かっているけれども、終わりの時に回復する栄光の自由のために、神の意思に従って虚無に服していると教えてくれます。

ローマ人への手紙8：18－23（パウロ）

大学生の頃猫を飼っていたことがあるのですが、ある時、「この猫は、僕よりもはるかにはっきり、神様のことを分かっているんじゃないだろうか」と思ったことがありました。

あの木も、あの狸も、あの海も、あの山も、あの月も、あの太陽も、神が創造主であることを、そして、今あるこの世界が秩序の壊れた不自然な世界であることを、また、その不自然な状態を終わらせ、自然な状態、至って平安な栄光の自

由に満ちた世界に造りかえられることを、さらには、そのすべての救いのわざが、イエス・キリストにあってなされることを知っているというわけです。

人間以外の造られしすべての被造物は、

神様が回復しようとしておられる栄光の自由の世界のために、まず人を救い出し、神の子どもとし、そして時に適ってその神の子どもとされた神の民たちと共に、自分たち被造物も滅びの束縛から解放され、神の民たちが受ける栄光の自由に与れるという希望ゆえに、今この不自然な状態に神の意思に従って服していると言います。

この事実を知らないのは、人間だけです。

いや、もっと正確に言いますと、認めようとも受け入れようともせず、神様の観点からのみならず、造られし被造物すべて、天にあるものも地にあるものも、見えるもの見えないものもすべてひっくるめて、今ある状態が不自然なものだということを知っているのに、

人間だけが不自然なものを自然だと言い張り、自然淘汰という世界観に染められながら、その不自然なスパイラルに丸め込まれていることを仕様がなくて嘆いているばかりで、せっかく脱する道があるのに、脱しようとしなくて不自然な頑固さに捕らわれています。

私たちのこの世界は、何だかよくわからないけれども、何かの拍子にたまたま何かよくわからないことが起こって、何だかよくわからないけれどもここまで時が刻まれ、ここまで来て、こんな世界になったのではなく、そこには意志が、神の意志があるんです。

元々、万物は主イエス・キリストによって造られ、キリストは造られしすべてのもののかしらとして万物を統べ治め、万物がキリストの内にありましたが、すべてのものが墮落しました。

何から墮落したのかと言いますと、天使たちから、天の御使いから墮落しました。

聖書の記述によれば、天使の1／3が神に反して墮落し、墮天使、サタン、悪魔、悪霊となって、肉と欲のままに従う空中の権威を持つ支配者として、神のかたちに唯一造られた神にとっての特別な存在である人間を誘惑し、罪に落とし入れ、神に背を向けさせ、このような歴史的霊的事実を虚構と思わせ、不従順の霊に生きる者へと変貌させることをもって、神を冒瀆しました。

人が墮落したことゆえに、今度は、自然界天然界を先ほどローマ書8章で見ましたように、神様は滅びの束縛、呪われたものとなさいました。

土地ものろわれ、空ものろわれ、ありとあらゆる生物無生物すべてがのろわれ、そののろいのもととなった墮落した人間を、人間界を、天然世界が抵抗し、拒否

し、拒絶するようになってしまいました。

そしてついには、元々無かった死が地に入ってきました。

すべての生きとし生けるものに死という虚無、絶望、束縛が入ってきました。

正に、死こそ罪の報酬ですね。

その死が地に入り込んできたがために、人間界のみならず、自然界にも流血という惨たらしい殺戮が入って来ましたが、人は、それこそ弱肉強食自然淘汰という至って自然な生態系だと宣うようになりました。

イザヤ書 65 章などに記されている本来あるべき姿に回復した世界を描写している箇所を皆さんよくご存じだと思いますが、その本来あるべき自然な様子を見てみますと、そこには、いのちの源である血を流すという行為が一切ありません。

生まれる前に死ぬ子もいなければ、生まれて死ぬ人もおらず、乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、マムシの巣に手を伸ばしながら喜んで遊び、狼と子羊はともに草を食べ、豹は子やぎとともに伏し、獅子も牛と一緒に戯れながら美味しそうに藁を食べています。

私たちが自然な状態だと、ナチュラルだと思っているものが、至って不自然なもので、不自然な状態で、不自然なものを自然だと思い込みながらこの不自然な世界を生きていることを良く表しています。

そして、その不自然な状態からの回復が、神がなしてくださったキリストの十字架と死と復活を通した救いのわざだと、みこころの奥義だと教えてくれます。

人間同士教え合いながら常識だと言っていることが、実は（神様の観点から見ると）至って非常識で、あり得ないほどに秩序乱れた、平安もなければ、平和もない不自然なことだと教えてくれます。

小さな命が血みどろになりながら強者に食されることを見て、「嫌だなあ」と思うこと、それこそ、神様が、私たちに与えてくださったキリストにある回復を本能的に望んでいる小さくも、大きなしるしです。

だから、人々がイエス様にしるしを求めたところで、「もうしるしは十分にありますし、これ以上のしるしは、わたしは示しません」と仰ったわけですね。

Part Four

聖書の記述からしますと、神様がキリストを通して成して下さる世界、新しい天と新しい地にも、文化があり、文明があり、生態系があると思われます。

でも、その基準や土台が、今の世界とは全く違います。

キリストにあってお立てになったご計画であり、キリストにあってひとつに集められた本来あるべき自然な世界です。

それゆえに、ここで、一つ確認しておくべきことがあります。

それは、すべてのものがキリストにあって一つに再び集められるという約束がなされるということについては、聖書は確かに教えていますが、

その日がいつなのか、それがなされる主の日、終末がいつなのかについては一切教えていませんし、「知る必要はない」とまで言っていることです。

つまり、私たちに必要なのは、いつではなく、あるという、来るという事実だけで十分だということです。

どんなことがあっても、どんな状態であっても、どんな境遇にあっても、結局、約束した通り神様は成し遂げてくださいます。

愛してくださっているということ、哀れんでくださっているということ、それらすべてのことに報いてくださるという、必ず成就する約束があるという事実だけで十分ですし、

その事実を知って生きることが、私たちをもってして、「主にあって誠実に生きたい」と願わせます。

聖書的に言うならば、小さなことに忠実であること以上の大きなこともなく、深刻なことはありません。

もし、明日イエス様が来られ世界が滅びると分かったならば、今日帰す予定だった借金を返さなくてもいいとか、今日謝ろうと決心したその決心をもみ消していいとか、

または、やっていること全部端に追いやって、徹夜でイエス様がいらっしゃるその時まで、これまでしたこともない断食祈祷をもって祈り倒すとか、一度も読み通したことのない聖書をぶっ続けで読むとか、

逆に、「イエス様向こう10年は来ないらしいよ」と聞いたら、「聖書も、祈りも、礼拝もまだいいや!」というのは、イエス様が私たちに望んでおられ、聖書が私たちに教える、終末を知る者の生き方ではありません。

終末を知る者の生き方は、今あるその小さなことに忠実に生きることです。

Conclusion

私たちは、父なる神様がイエス・キリストにあって、天にあるもの地にあるもの、歴史のすべてを、存在のすべてを一つにお集めになることを信じています。

私たちの目には、世界がさらに悪化し、良いと思われない勢力が増大し、どこからどう手を付けていい物やら分からないほどに、時が経てば経つほど悪辣になり希望がないように見えても、神様はキリストにあって、このすべてのものを再び、一つに集めると確かに約束しておられます。

だから、小さいことに忠実に生きることが出来ます。

神様は、人の抛り頼むものによってことを成すお方ではなく、「そんな方法やものでは、到底成し得ない」と私たちが思うような方法、条件、原因をもって、想像も出来ないような結果を造り出すお方です。

だから、負けたからと言って、足りないからと言って、失敗したからと言って、物事思う通りに行かないからと言って、腹が立つからと言って、分からない納得が行かないからと言って、出来ないからと言って、放棄する必要もなく、動揺する必要ありません。

事が成るために、何か革命のようなものを起こす準備を進めるとか、ものすごい歴史的なリーダーを期待するとかではなく、私たちに期待されていることは、目の前にある小さなこと小さな人に対して、忠実であることです。

なぜならば、どんな富も、どんな力も、どんな人物も、どんな知恵や知識も、神様が成すと仰ったご計画と結論を妨げ、変えることは出来ないからです。

このことが、どれだけ私たちにとって、大きな力となり、励ましとなり、慰めとなることか分かりません。

私たちは、イエス様が死んだラザロを生き返らせたことを信じ、荒れ狂う海を静めなされたことを信じ、父なる神様が私たちをお救いになるために、イエス・キリストを地上に送り、十字架に架けてくださったことを信じています。

そして、この世界が主の裁きのもと終わることを信じ、主を求め、主に信頼する者たち誰一人として失敗なく、永遠の御国で、新しい天と新しい地で、喜びの中顔と顔を合わせて主とお会いすることを信じています。

そうです。これが私たちの信仰です。

お祈りいたしましょう。

祝祷：エペソ書 1：9 b－10